

辺野古の基地建設は今すぐ STOP! 普天間基地は沖縄以外の場所へ 引き取ろう

沖縄の米軍基地と辺野古

国土面積比 0.6%、人口比 1%の沖縄に、日本にある米軍専用施設の 70%が集中するという異様な状態が続いています。さらに「普天間基地の移設」という名目で、名護市辺野古に新たな米軍基地がつくられようとしています。辺野古の計画は総面積 205 ヘクタールに、1800メートルのV字滑走路を2本備えた巨大なものです。総面積のうち160ヘクタールは海を埋め立てることになっており、沖縄防衛局は 2017 年 4 月に護岸の造成工事に着手、2018 年 12 月には埋め立て予定地への土砂の投入を開始しました。沖縄の人々の「辺野古 NO!」の世論を後ろ盾にした県の対抗措置や、連日続く住民たちの阻止行動などにより、当初想定されていた工期はずいぶん遅れています。2020年1月末時点の

土砂投入量は、埋め立て全体に必要な1.6パーセントにすぎません。さらに、辺野古の基地建設計画は様々な面で大きな問題を抱えています。

環境面での問題

環境アセスメントの不備、ジュゴンやサンゴ礁、埋め立て用の外来土砂による生態系破壊など、様々な悪影響が懸念されています。また、2018 年には、辺野古新基地建設予定地の海底に、マヨネーズ状の軟弱地盤が、最も深いところで水深 90 メートルに達して存在することが明らかになりました。全世界を見てもこの深さの地盤改良をした実績はありません。国内の作業船で地盤改良できるのは海底 70 メートルまでとされており、完成させても地盤沈下が起こることは明らかです。

経済的な問題

政府はこれまで辺野古基地建設の総工費は「少なくとも3500億円以上」としていましたが、軟弱地盤の改良工事を含めた工期の延長に伴い、約 9300 億円とする見通しを示しました。これもさらにかさむ可能性が高く、その費用をなぜ日本側が負担するのかなどの議論もまったくなされていません。

軍事的な問題

沖縄に基地があるのは、「地政学的理由」だと言う人がいます。また、沖縄の基地の7割を占める海兵隊は「抑止力」であるとも言われます。しかし、その「地政学的」の中身、「抑止力」の定義はあいまいです。沖縄は台湾海峡と「北朝鮮」を同時ににらむことができるとも言われますが、長崎県や佐賀県など、九州も距離的には沖縄と変わりません。また、海兵隊が出勤しようとするれば、長崎県佐世保にある海軍の艦船が丸1日以上かけて沖縄にやってくるのを待たなければなりません。2012 年、当時の森本防衛大臣は、「海兵隊は1万人ほどまとめて MAGTF (地上部隊、航空部隊、その支援部隊の3つの機能をトータルで持っている部隊)の機能を維持すれば、日本の西半分ならどこでもいい。」と発言しました。他にも、日米の政治家や軍事専門家が、これまで何度も「基地は沖縄でなくていい」と述べています。「では、なぜ沖縄なのか」との問いには、「政治的理由(他の地域では抵抗が大きいから)」だと述べているのです。